

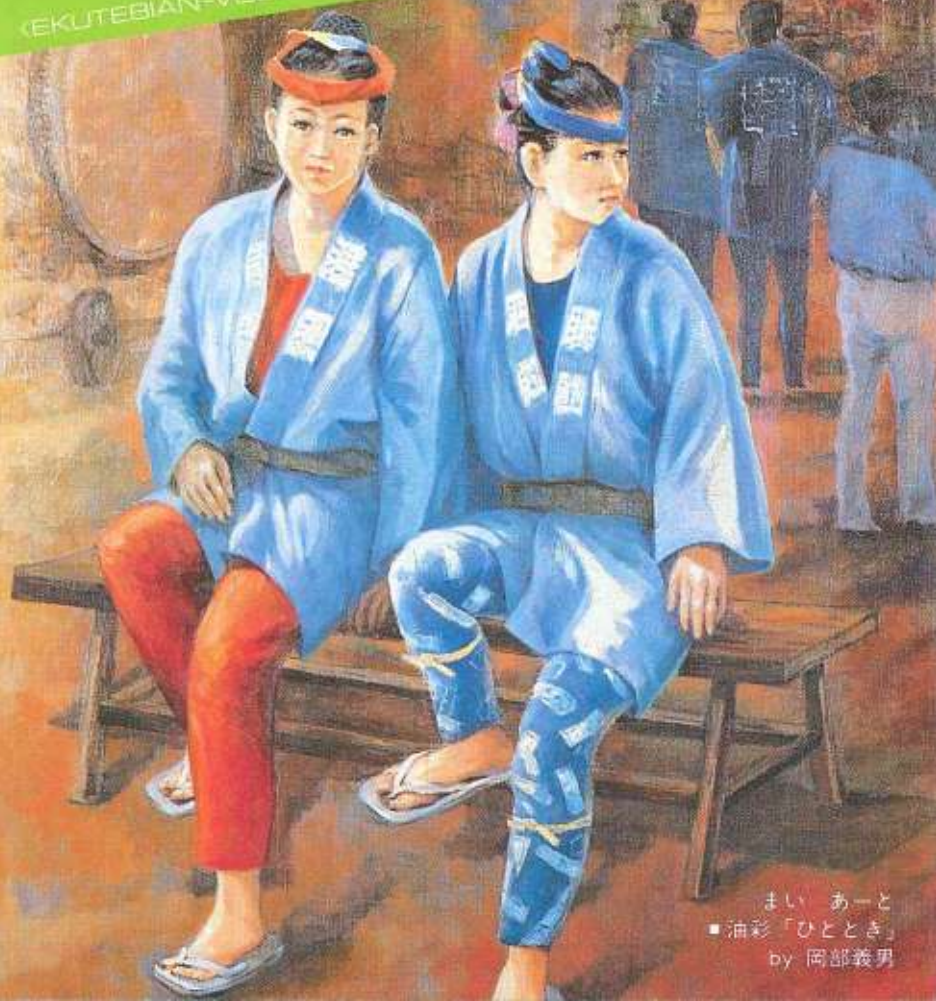
月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

えくてびあん

〈EKUTEBIAN-VOL.6. AUGUST. 1989-EKUTEBIAN〉

8



まい あーと
■油彩「ひととき」
by 岡部義男

まつりだ、まつりだ①
ワッショイ、ワッショイ

夏が呼ぶ夏

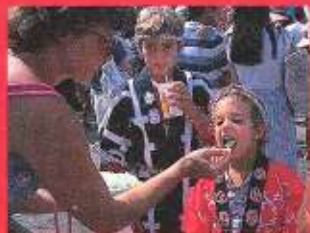
祭りは汗だくになって
盛夏におこなわれるが
人びとの胸には秋、冬
春のおもいも宿ってい
て、一年のうちに積み
重ねた何かが爆発する
一日。立川にお諏訪さ
まがあることでどんな
にか、この街が立川ら
しくなっていることが
計り知れない。そして
賑やかなうちに暮れよ
うとする祭りの日の夕
方、小さな「秋」がもう
生れようとしている。



天までとどけノ麗しき「乙女の祈り」



「宵出し」撮影・中西定夫さん(立川諏訪まつり実行委員会主催/写真コンテスト金賞作)



異人さんにとっても、まつりは祭り



暑合いが、暑合いを呼んで、直哉けの下浴力!



漢字テスト
空欄に一字挿入を試みよ。

青 ● 白日 ●
温 ● 清定 ●

8月19・20日開催
ふるさと文化祭「立川・光と音のシンフォニー」(仮称)
※詳しくは、☎232111内352

普通、初めての外国生活の場合、最初のうちは安心して泊れるホテルにするでしょうが、私達は二人でいれば何とかなるだろうと、ホテルよりちよつと安めのペンションに泊りました。しかし、これが建物中チゾクさい。それもオープンで魚がした匂いで、ま、一週開程で慣れましたが、もう一つの苦

ポックスメール
えくびあん
AIR MAIL

しめはトランポリンのようなベッ
ド。寝返りの時などビヨーンと飛
び出してしまふのは、と心配に
なる程。(妻は私が太って重過ぎる
からだと言いますが)でも、この
最初の一月は非常に楽しい時でも
ありました。ペンションというの
は普通の家庭の部屋を
借りるので、イタリ
アの一般の人達の生活を
知る良い機会だったの
です。ペンションを
一人で切り盛りしていた
太ちよのおばさんは本
当に優しくて、適当に
厳しくて、実に良い人
でした。イタリア人は
総じて綺麗好きで、毎
朝定刻に掃除機の音が覚めま
す。その掃除の丁寧なこと。洗濯物
など少しもためたておくこと。「洗
なさい」と全部持って行かれます
そして必ずアイロンです。「かけな
さい」と母親のように言われるの

半世紀にわたり。獅子舞、
にかかわってこられた江沢
さん。「気がつくとも会長など
という役になって獅子舞を
守っていきまして、いつの間
にか古い部類に入ってしまった
いました。私も小学校5年
の時から笛を吹き習い、二
十歳の時に獅子の役者とし
てやらせて頂くことが出来
ました。当時は、奉納させ
て頂く厳粛なものでしたか
ら、指導してくれるおじさ
んが厳しくてね、腰の入れ
方や足の上げ方が悪いとビ
シバシとききましたね。別に
不平もなく子供なりに真剣
でしたよ。舞台上立ったと
いうだけで、今でいうヒー
ローでしたね。最近の子供
たちは塾や部活で大忙しで、
ピシッと合った時は、なん
かいい感じがしますよ」とも
いい気分ですね。



大きいと思つた事はありませんで
した。ペンションの一ヶ月が
過ぎ私達はミラノの人々に交つて
アパルタメント(マンション)のよ
うなものに移り家族だけの生活
を始めましたが、それはまた後程。

で自分でしなくてはなりません。
最初の頃「アイロンのかけ方が良
くない。外出の間にやり直してあ
げる」と太ちよのシニョーラが言
うのでまかせて出掛け、帰宅して
ベッドの上で広げられている洗濯物
を見てビックリ。何と！イタリ
ア人は洗濯物全てに
アイロンをかける
のです。勿論下着
も。アイロンの
し餅のようになっ
た僕の下着を(し
たくないでしよう
が)想像してみ
て下さい。真れ。僕
は今だかつて自分
の下着がこんな

若いころは役員として、
役者の身の回りの事を引き
受けていたという西村さん
だが、いつしかうたに魅せ
られうたうたになつてい
た。「そう、40年程になります
かね。唄の調子や、節回し
を先輩から見れば真似て覚
えました。音楽センスがあ
つてきちんと発するよりも、
生活感があり、親しみをも
つてうたうところ、地域
芸能のよさがあると思いま
すね。唄の手は、笛の曲を
一通り知っていないとちよ
はぐなものになってしま
います。自分のところだけで
なく、相手のところもよく
知ってないと獅子舞にな
らないですよ。本番で息が
たちは塾や部活で大忙しで、
ピシッと合った時は、なん
かいい感じがしますよ」とも
いい気分ですね。

「神社の獅子舞ですから、
昔はこれに携わるのは名譽
な事で、皆の憧れの的であ
りました。私が始めたのは、もう
40数年前ですが、笛の吹き
手が20人近くもいましたね。
始めて2、3年の者はあま
り音を出してはいけな
い、とかいろいろ厳しかつた
ですよ。何しろ舞いの間に
あわせて吹くので5年でも
一人前にならないんです。
今、吹き手は7人位、皆当
時からの人で50、60才代で
す。奉納の時、本来は一時
間半かかるんですが、休
みに吹くつめなので今で
は一時間位に縮めています。
これからは小、中学生たち
に教えて年々何回か練習会
をするなど、何とかして関
心を高めていかなくてはね」と

「こぼれの方も多いかと思
います。もともと獅子と
棒とは別々のもので、徳川
の中期のころ、五十嵐助左
衛門という方が伊勢参りの
途中三河の国で棒振りを習
得し、五穀豊穡のためお願
訪さまに奉納されました。
それがいつしか獅子とひと
つになって今に伝わって
いるんですがね。昔からこの
棒仕の役者は、田名とい
う台、滝ノ上、山中の三つ
の村で担当することにな
つていまして、その地域にあ
る家々の長男が誇りをもつ
て舞ったものでした。昔は
緊張して習ったが、最近
はとも楽しくリラックスし
て練習しています。色々な大
人とのふれあいがもてる場
としていいようですね」と



ししまい まち
伝統の舞、立川

市の無形文化財に指定されている獅子舞。自慢の羽根をふり立てる獅子頭にも似て、伝統芸を支える人びとの胸は熱い。獅子フンジの舞がこの夏を染めるか。

夫婦
声楽の勉強のためミラノに留学中。

「自分ではなかなかに
アイロンをかける
のです。勿論下着
も。アイロンの
し餅のようになっ
た僕の下着を(し
たくないでしよう
が)想像してみ
て下さい。真れ。僕
は今だかつて自分
の下着がこんな

「自分ではなかなかに
アイロンをかける
のです。勿論下着
も。アイロンの
し餅のようになっ
た僕の下着を(し
たくないでしよう
が)想像してみ
て下さい。真れ。僕
は今だかつて自分
の下着がこんな

「自分ではなかなかに
アイロンをかける
のです。勿論下着
も。アイロンの
し餅のようになっ
た僕の下着を(し
たくないでしよう
が)想像してみ
て下さい。真れ。僕
は今だかつて自分
の下着がこんな

「自分ではなかなかに
アイロンをかける
のです。勿論下着
も。アイロンの
し餅のようになっ
た僕の下着を(し
たくないでしよう
が)想像してみ
て下さい。真れ。僕
は今だかつて自分
の下着がこんな

「自分ではなかなかに
アイロンをかける
のです。勿論下着
も。アイロンの
し餅のようになっ
た僕の下着を(し
たくないでしよう
が)想像してみ
て下さい。真れ。僕
は今だかつて自分
の下着がこんな

「立川諏訪まつり'89」開催

8月26・27日の両日にわたり行なわれる。

26日 ● 万燈神輿・民踊流しおどり
おま鼓まつり広場ほか

27日 ● 太山車・宮出し
おま鼓まつり広場ほか

鶴町1丁目に住む猪俣さん「いつも「宮出し」を見に行くんですが、しらすしらすに身体がフワフワちゃうんです。今年も諏訪祭り、楽しみです。」

表紙は語る
まい あーと ● 撮影「ひととき」
by 岡部義男

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

いつも、暮らしの友人。
出会いと
水いおつきあいを大切に、
皆さまの暮らしを
お手伝いします。

埼玉銀行

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

月刊えくびあん 第61号
平成元年八月一日発行
発行所 えくびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
バークレイハウス501号
電話 ☎0425200882

編集人 立井啓介
発行人 沖野嘉男
印刷所 株式会社 大野印刷

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

「いや、まだまだですよ」と、第一声を放った岡部義男さん54才。ご謙遜されて、キャリアなど聞いてみますと、「いや、本当に浅くて、ようやく5年目を迎えたところですよ」

長年描き込まれた味わいと、洗練された構図の様に感じられる作品ばかりである。「もともと絵は好きだったから、でもまだまだ芸術的とはい

第2回

我家は3代目

老舗といい暖簾の重みという。それも3代つづけば語り尽くせない物語がある。この街にも沈黙して静かなる物語のかずかずがそこに隠されている。

挽く手に確かな技を伝えて

二見屋甚八商店

鍛冶治の名門「二見屋甚八」に初代が弟子入りしたのが12才。手のたこを小刀で削りながらの修業を12年、更に目立ての技を修めて独立。2、3代目も鍛冶治の修業を経て跡を継ぎ、今は外回りを2代目、店を3代目が受け持つ。進んで跡を継ぎ、時代に応じた工夫を重ねる3代目を見守る父母・祖父父母の目には、安堵と喜びが……



“鑑の目立て”がもともとの家業だが、今は“研ぎ”が主に。



看板への誇りが品揃えにも。職人達の腕を支える道具類。



上保さん一家●左から文男さん、浦子さん、根太郎さん、カツさん、義経さん

「男だけじゃない。女だって大変だった」とカツ夫人をいたわる源太郎さん。「昔の職人は女の店番だと帰ってしまう。道具を覚えて応対できるまで10年かかった」と浦子夫人。一家で支えてきた家業の「技」。今、交す笑顔が暖かい。